

SSKA 頸 損

KEISON No.98

目 次

巻頭言

全国総会岐阜大会開催される ～一期一会の心が集う～ ・・・・・・・・・・ 1

特集Ⅰ 「全国頸髄損傷者連絡会総会」

‘09 全国総会・岐阜大会報告（新役員決定） ・・・・・・・・・・ 2

特別報告 1. 人工呼吸器使用者の自立に向けて「2泊3日の外泊チャレンジ」 ・・・ 3
2. 介助体験を通して 「2泊3日の外泊支援」

シンポジウム概要 障害者の自立を支援する技術について ・・・・・・・・・・ 7

2008年度会計決算報告・2009年度予算 ・・・・・・・・・・ 9

年間活動方針決定（誰もが自立して生きられる社会を目指して） ・・・・・・・・ 10

総会を主催した側から 岐阜大会実行委員会 ・・・・・・・・・・ 11

連 載

会員紹介 頸損連絡会・岐阜“森部昌子さん” ・・・・・・・・・・ 12

お役立ち「夏グッズ」 ・・・・・・・・・・ 14

ホームページの掲示板に書き込まれた頸髄損傷者の温熱環境に対する意識 ・・・ 15
東京理科大学 三上功生

特集Ⅱ 「それぞれの体温調整の工夫」 ・・・・・・・・・・ 17

全国支部別機関誌（紙）一覧 ・・・・・・・・・・ 28

第2回全国頸損・リハ工学協会合同 神戸シンポジウム（詳細）報告 ・・・・・・ 31

わたしたちの生活と足が奪われる ・・・・・・・・・・ 33

「頸髄損傷者の自立生活と社会参加に関する実態調査」中間報告 ・・・・・・ 35

第36回 国際福祉機器展H.C.R.2009のお知らせ ・・・・・・・・・・ 36

全国頸損支部・本部連絡先 ・・・・・・・・・・ 37

リレーエッセイ ・・・・・・・・・・ 39

全国頸損＆関係団体 年間行事予定（2009年8月～） ・・・・・・・・・・ 40

全国総会岐阜大会開催される

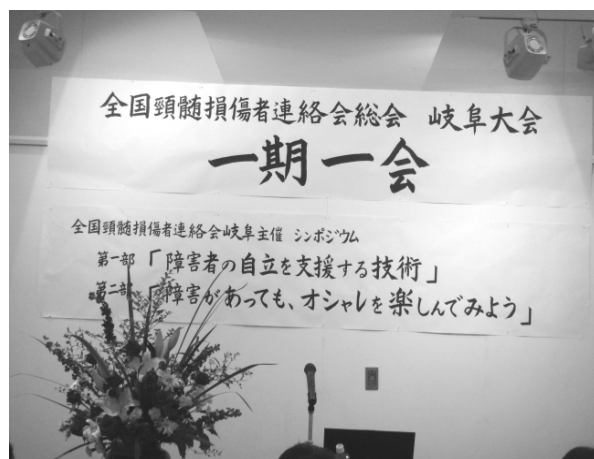
～一期一会の心が集う～

会長 三戸呂克美

去る、5月16・17日の二日間にわたり、第36回全国頸損連絡会総会が岐阜市で開催されました。岐阜での全国大会開催は2度目、この度も雨。金華山も雲に隠れて仰ぐことができませんでした。しかし、開催の準備に奔走され当日を迎えられた岐阜支部の皆さんからは雨などどこ吹く風と熱気にあふれた迫力を感じました。全国総会は年に一度支部持ち回りを基本として開催されます。昨年は大阪支部が担当しました。担当になる支部は順番ではなく自己申告制を取っているのが頸損連絡会の特徴です。大会を開催する担当になると会場探しから始まり、日にちの設定、資金調達、人材確保等色々な準備作業があります。これらは個人の体力、会の体力共に必要とします。しかし、開催にこぎつけて終えた後には固い絆ができていくのです。決して消耗だけで終わるものではありません。今回も岐阜の皆さんには本当にお世話になりました。参加された皆さんの満足している顔を拝見して岐阜支部万歳と思わず叫びそうになりました。岐阜支部の皆さんも同じご意見だと思いますが、松本会長、篠田事務局長との会話の中で、岐阜支部の会員がこれだけ団結できたのも大会を開催したからだと言われた時は私自身やったー！と思い嬉しさがこみ上げてきました。皆で取り組むことで仲間意識が芽生え団結ができたのだと思います。この絆こそが我々が求めているものです。全国大会は今回で36回目ですが、36年間続けてこれたのは先輩たちが作った道を会員の皆さんや頸損連絡会に関わっていただいた皆さんと共に

に歩み、時には厳しい意見ももらいながらの温かいご支援、ご協力があったから今日までこれたのです。そして36年前の当時の状況は今と違う状況であることはご理解いただけると思います。当時の事情を聞くことができるのもその時を生き抜いてきた先輩がいるからです。そしてその時の運動から今日まで勝ち得た成果が今の法律、制度につながっています。しかし、政情により我々が希望している生活とは違う方向に行きかけている現実もあります。全国総会是我々が求める正しい道を話し合い確認し、また新たな道を見つけるための頸損連絡会の最高決議機関なのです。今回参加を見送った人、また体調が良くなって参加できなかった人も次回は是非参加してください。来年は京都支部が担当します。京都でまたお会いしましょう。

一期一会の心を持って！



(大会のテーマ)

‘09 全国総会・岐阜大会報告

事務局長 八幡 孝雄

5月16日（土）～17日（日）の2日間、JR岐阜駅アクティブGの2F「TAKUMI ミュージアム」を主会場に、テーマを一期一会として全国総会「岐阜大会」を開催した。参加者は頸損者と関係者の総数が110余名であった。



16日、シンポジウムの「第1部」では「障害者の自立を支援する技術について」ということで、中部学院大学・准教授の井村保氏に基調講演「障害者の自立を支援する技術（アシスティブ・テクノロジー）の今とこれから」、岐阜県情報技術研究所・主任研究員の千原健司氏には「高機能電動車いすの開発について」講演して頂いた。それぞれ支援技術研究者、開発者という立場で、身近な事例を出しながら、現状、今後の課題を分かりやすく整理して話して頂いた。

また「第2部」では「障害があってもおしゃれを楽しんでみよう」という華やかな着物ファッションショー、浴衣の試着体験、指一本で弾く楽器「一五一会（いちごいちえ）」を使った障害者の音楽グループ「Only One's オンリーワンズ」によるミニコンサートが開かれた。夜は会場を宿泊先の「ホテル岐阜キャッスルイン」に移し、110余名出席の交流会が賑やかに開催された。

17日は全国総会に先立ち、特別報告として兵庫

頸損連絡会の会員であり、人工呼吸器使用の米田進一氏から「2泊3日の外泊チャレンジ」、その米田氏を介助者として支えている大学生の藤田巖一氏から「2泊3日の外泊支援」というお話を、米田さんの外泊チャレンジを当事者の視点、介助者の視点でお話しして頂いた。続いて活動報告、会計報告、年度活動方針決定、役員改選と皆様のご協力のお陰で予定通り進行することができた。来年は京都で全国総会を開催予定である。

最後に、総会開催にご尽力頂いた頸損連絡会・岐阜の皆様には心よりお礼を申し上げます。

謝辞

全国総会・岐阜大会開催に際し、アステラス製薬（株）様のスターライトパートナー（患者会支援活動）事業による、イベント用資材（スタッフジャンパー、その他）の提供を頂きました。

アステラス製薬（株）様には心より御礼申し上げます。

09 全国本部役員

会 長	三戸 呂 克美（大阪：留）
副 会 長	坂上 正司（大阪：留）
副 会 長	古屋 祥宏（京都：新）
事務局長	八幡 孝雄（東京：留）
事務局長補佐	宮野 秀樹（兵庫：留）
編 集 長	菊地 敏明（東京：留）
会 計	菊地 敏明（東京：留）
会計監査	麩沢 孝（東京：留）
相 談 役	三沢 了（東京：留）
相 談 役	今西 正義（東京：留）
相 談 役	小森 猛（京都：留）

特別報告 1 人工呼吸器使用者の自立に向けて

「2泊3日の外泊チャレンジ」

米田進一(兵庫頸髄損傷者連絡会)



プロフィール

兵庫県生まれ。2005年(平成17年5月)交通事故によりC1損傷。完全四肢麻痺で人工呼吸器を24時間使用し、昼間はマウスピース、夜間は鼻マスクを使用。

受傷1年9ヶ月(平成19年2月)の時、関西労災の主治医の紹介で頸損連絡会のメンバーと出会い会員となる。その後平成19年6月に市民公開講座のパネラー、10月に初外泊、12月に学生ボランティアと大分県へ旅行。

平成20年5月に大阪全国大会に出席、7月に鳥取県訪問、10月に学生ボランティアだけで2泊3日の宿泊訓練を体験、11月に四国中央市訪問し活動範囲を広げている。

人工呼吸器使用者の存在をアピールしていくために外に出て行きたい。今を生きているからこそ楽しむ人生を諦めたくはありません。未だに外出さえ出来ない人も多くいます。そんな人たちを前向きに出来る活動をこれからやりたいと思います。全国の人工呼吸器使用者の皆さま、外に出ることを諦めないで！

まず、現状を知ってもらうために

● 受傷時期

受傷したのは、2005年5月、大型トラックを運転中に事故に遭った。頸損レベルはC-1、24時間、人工呼吸器を使用。日中はマウスピース、就寝時は鼻マスクを使っている。

● 現在使っているサービス、受給時間 280 時間

月曜日	訪問看護、リハビリ、泌尿器科往診(膀胱路洗浄、交換など)
火曜日	訪問入浴、訪問リハビリ
水曜日	訪問看護、訪問リハビリ
木曜日	特養施設デイサービス、労災病院診察(月1回)
金曜日	午前外出、訪問看護、訪問リハビリ、内科(月に一度往診)
土曜日	訪問清拭、外出など(ヘルパー、ボランティア)
日曜日	休日、外出など(ヘルパー、ボランティア)

1ヶ月で280時間、重度(身体介護含む)訪問介護を使用。月に一度、関西労災病院へ定期診察に行く。リハビリは約1時間半、呼吸訓練で人工呼吸器を外して片言ぐらいの単語を話すまでになった。もっと訓練をして呼吸器を必要な時だけ使用するまでになりたい。

● 困っていること、してほしい支援（願望）

①公共交通機関を利用する際に、エレベーターの広さが様々なので、その都度レッグサポートの取り外しをしなければ乗れないものが数多くある。その際に足にアザが出来ることもある。エレベーターの設置場所が遠く、介助者にも負担が掛かる。電車内の車いすスペースは狭い。客室に入れずデッキに居座ったこともある。車いすの大きさは様々なので、余裕のあるスペースを確保してほしい。

②市には、数日でも介助者が外泊できる制度を希望する。家族も高齢になってきて、制度により外出の範囲によって介助員の外泊ができないことが、当事者には不安である。

● 呼吸器使用者が世間に知ってほしいこと

呼吸が出来ないことを想像できるだろうか？「話す」ことはとてつもなく労力が要ることを知ってほしい。呼吸が出来ることは当たり前なのだろうが、私たちは話すだけで酸素不足になることがある。しかし「話す」ことは生活の一部であり意思表示であるため、疲れていても話すことをやめたくはない。会話することで自分の呼吸訓練にもなる。辛くても相手と話すことで気分転換になり、頑張ることができる。

チャレンジ報告

受傷してから 3 年以上経ち、次に何をすべきなのかと考えた。今は両親が同居してくれているので安心して生活出来ているが、この先何年後かには自分で生活をしていかなければならない時が来る。自分で自立する生活は、すぐには出来ない。計画を立てても実行するまでの準備や経験を積まなければならない。人の力を使って生活するのは、自分の生活のためである。人に介助してもらおうと予想できないことも起こる。その時に対応できる事、出来ないこと様々である。場合には失敗もあるが、「自分で何処まで出来るのか試したい」と思い、宿泊にチャレンジした。

失敗して当たり前なので出来なかった時に「何が原因だったのか？どうすれば良いのか？」と、新たに気がつくことがあり、勉強になった。「人に伝える難しさ」「家族との距離感」など、やってみないとわからないことを学んだ。とりあえずやってみる。今より一歩でも変わりたい。自立生活が出来るまでのステップとして訓練は自身の課題であると思う。

〈自立への想い〉

自分は家の中でも何処に物が置いてあるのかほとんど把握していない。衣類や看護で使う物など自分である程度知っておかなくては、介助者に指示する時に困ってしまう。自分が指示を出し、人のサポートを受けて生活することは簡単ではない。

少しでも両親の介護を減らしたいと思いながら、なかなか思うように進んでいない。親だから甘えられるのだろうが、やはり苦労は掛けたくないと思ってしまう。苦労ばかり掛けて、何一つ親孝行をしてやれない事は辛い。障害者になって更に介護に追われ、自分たちの時間も取れない現状はやはり辛い。

自分がもっと努力すべきですが、両親が介護から離れ、ヘルパーやボランティアの介助で生活が出来るまでになれば、他に何もできない自分が出来る精一杯の親孝行のような気がする。自分で責任を持って生活することに意味があると信じ、この先自分自身が変化するために壁を乗り越えたい。

特別報告2 介助体験を通して

「2泊3日の外泊支援」

藤田 巖一(神戸学院大学・学生)

プロフィール



山口県生まれ。

2006 年に神戸学院大学・総合リハビリテーション学部・社会リハビリテーション学科に入学。2007 年 6 月に市民公開講座のボランティアをきっかけに、兵庫頸髄損傷者連絡会との関わりを深めていく。2007 年 12 月に大分別府温泉旅行の介助ボランティアで米田さんと知り合い、以来、外出・外泊の介助ボランティアを行ってきた。

障害者が自己選択、自己決定できる社会になるためにはどのような支援や環境が必要なのか、当事者とともに活動を行いながら、必要なニーズを直接肌で感じより良い社会づくりの一員となれるよう活動していきたい。

プロジェクト報告

1. なぜ兵庫頸髄損傷者連絡会に関わることになったのか

2007 年に明石市で開催された市民公開講座にボランティアで参加したことがきっかけで、兵庫頸髄損傷者連絡会を知る。その後、米田さんの介助ボランティアを中心に活動をしてきた。米田さんとは主に別府温泉旅行や鳥取旅行などに出掛けた。今回の宿泊チャレンジにも米田さんの介助者として関わった。

2. 宿泊訓練で見えてきた問題点・課題

～制度～

○介助者の確保について（制度上利用できるサービス時間、事業所の対応、）

- ・制度上利用できるサービス時間が 280 時／月であるが、外出の際、移動の介助に利用できる時間は 280 時間のうち 30 時間であること。つまり、身体介助は 250 時間しかない。
- ・現在、外出時は二人の介助者が必要である。制度上利用できるサービス時間は 250 時間の半分(125 時間)
- ・そのため、仮に 2 泊 3 日の外泊でヘルパーを使えたとしても 1 ヶ月に決められたサービス時間をほとんど使い切ってしまうため、制度が利用できない。
- ・人工呼吸器を使用しているため、介助派遣を拒否する事業所が多い。

～環境～

○移動の際に存在するバリア

- ・電車を利用して移動する際は、駅のホームまでにエレベーターを利用する。しかし、そのエレベーターのほとんどは米田さんの車いすが入らないくらい狭い。そのため、エレベーターを利用する際はレッグサポートの着脱が必要となってくる。そこには必ず介助者の労力と時間が必要となってくる。

- ・電車に乗り込む際は、ホームと電車の間にできる段差を解消するスロープが必要となる。駅係員を呼んで、スロープを持ってきてもらわないといけない。スムーズに乗降車ができないとともに、スロープを持ってきてもらうまでに時間がかかる。

3. 自分にとっての課題と今後の取り組みについて

○自分にとっての課題

- ・これまで見守ることがサポートだと思っていたが、考え違いであった。
- ・米田さんに、人的ネットワークを活かしてアドバイザーを紹介すればよかった。
- ・何か問題が起こった時に、自分たちだけで抱え込むのではなく、誰かに相談する必要がある。
- ・当事者から見えない部分の介助を、いかに円滑に行うか、その方法を共に考えていく必要がある。

○今後の取り組みについて

- ・学生と重度障害者の交流の場を設けて、より多くの人に知ってもらう活動に取り組んでいきたい。
- ・介助に責任を持ち、自立生活の力になるサポートができるように、関わっていきたいと思っている。



総会会場風景



浴衣を着たら国籍不明???



郡上踊りを踊るボランティアの皆さん



交流会場風景

障害者の自立を支援する技術について

■「障害者の自立を支援する技術

(アシスティブ・テクノロジー)の今とこれから」

井村保・中部学院大学准教授

私たちは日常生活動作(ADL)を確立して自立していく。障害者は自分でできず、道具も使えない。

障害者が生きていくために、福祉機器の助けを借りれば、自分で意思決定して行動していける。そうすれば人としての生活が確保でき、精神的に自立して、幸せに暮らしていくことができる。

福祉用具法（福祉用具の研究開発及び普及の促進に関する法律）には「福祉用具とは心身の機能が低下し日常生活を営むのに支障のある老人または心身障害者の日常生活の便宜を図るための用具及びこれらの者の機能訓練のための用具並びに補装具をいう」とある。

福祉用具は身体の機能回復が見られない時に、補装具・日常生活用具として必要である。

補装具とは◆身体の欠損または損なわれた身体機能を補完、代替するもので、障害個別に対応して設計・加工されたもの、◆身体に装着（装用）して日常生活または就学・就労に用いるもので、同一製品を継続して使用するもの、◆給付に際して専門的な医師の判定または意見書を要するもの、である。義手、義足、車いすなど。

日常生活用具は◆安全かつ容易に使用できるもので、実用性が認められるもの、◆日常生活上の困難を改善し、自立を支援し社会参加を促進するもの、◆製作や改良、開発にあたって障害に関する専門的な知識や技術を要するもの、日常生活品として一般的に普及していないもの、である。

環境制御装置（ECS）などは、頸損者には便利な福祉用具ですが、一部の自治体しか公的補助の対象にしていない。

必要な福祉機器を、必要な人に届けるためには、①ユーザーの声を機器開発者に届け、一緒に開発すること。②また行政には要望書を出すだけでなく、具体的な必然性、費用対効果を、当事者団体として訴えていく必要がある。

日本リハビリテーション工学協会

<http://www.resja.gr.jp/index.html>

もよろしくお願い致します。

■「高機能電動車いすの開発について」

千原健司・岐阜県情報技術研究所・主任研究員

高機能電動車いすの開発にあたっては、頸損ユーザーに企画の段階から参画して頂いた。ユーザーが関ったから、ロボットアーム、多機能指示末端付きの、ここまでの製品開発ができたと思う。

岐阜県情報技術研究所では、先端技術を使って新産業の創出、新分野進出（2足ロボット、全方向画像処理等）、応用技術を使って産業の高度化を目指している。福祉支援機器の開発には情報・ロボット技術が役立ち、今後成長が見込まれる新たな産業として有望である。

研究所では障害者の切迫したニーズに応えられるように、新しい産業として地域企業が取り組めるように、地域内の産・官・学ならびにユーザーと、企画の段階から連携し、研究開発を行っている。

岐阜県でも少子高齢化社会となり、障害者数は増加の一途である。障害者を介助者だけで支援するには十分でなく、障害者の自立的な活動を支援する機器が必要。

高機能電動車いすの開発では、肢体不自由者を総合的に支援する機器を提案し、付属の各機能が複合的な効果を生みだし、障害者の活動範囲が飛躍的に向上することが期待される。

開発にあたっては、安全なロボット技術で、利用者が使いやすい操作装置の実用的な機器とし、ユーザーが真に望む、コスト面でみ合う機器を目指した。

また産・官・学の連携をコーディネートする上で心がけた事は、各々の本来の使命・目的を尊重し、ユーザーとも企画の段階から連携して継続的にすり合わせを行った。企業理念・戦略にあった開発で、大学で研究しているものを応用し、地域振興に役立つものであって、ユーザーの様々な要望に応えられるようにしようとした。

現段階の「高機能電動車いす」の特徴は、多機能指示末端を1つのジョイスティックで操作して車いす、ロボットアーム操作でき、他の入力装置も接続できるものである。ロボットアームは安全性を考慮したコンパクトで安価なアームで、紙やコイン等の薄いものや小さいものをつまめるハンドを持っている。平成 22 年の製品化を目指して、操作装置の改良、ロボットアームのハンド構造の見直し、コストダウン等ができるように努力をしている。

今後の課題としては①重度の頸損者でも安全に負担なく使える入力装置の開発、②リハビリテーション医学者との連携も図る必要がある。

(文責：事務局)

■高機能電動車いすの詳細情報は

岐阜県情報技術研究所のHP参照

http://www.com.rd.pref.gifu.jp/~imit/research_wheelchair.php



↑ 高機能電動車いす



↑ 花瓶を持つアーム ↓ 爪でリモコンを掴む



全国頸髄損傷者連絡会 2008年度会計報告書

(2008. 4. 1～2009. 3. 31)

単位：円

収 入	支 出
前期繰越 9 6 2, 2 6 2	団体加盟費 7 0, 0 0 0
本部会費 1 3 4, 5 0 0	事務所使用料 3 6 0, 0 0 0
本部運営分担金 8 2 0, 0 0 0	事務諸経費 4 7, 5 1 9
寄付金等収入 5 5 0, 8 8 3	通信・発送費 3 1, 5 3 0
受取利息 8 7 5	機関誌等印刷・編集費 5 0 0, 2 6 7
雑収入 9, 1 5 0	会議費 1 0 9, 2 2 0
	旅費交通費 2 2 5, 4 0 0
	雑費 6 7, 2 0 6
	次期繰越 1, 0 6 6, 5 2 8
合 計 2, 4 7 7, 6 7 0	合 計 2, 4 7 7, 6 7 0

会 計 菊地敏明

会計監査 麿澤 孝

全国頸髄損傷者連絡会 2009年度予算

(2009. 4. 1～2010. 3. 31)

単位：円

収 入	支 出
前期繰越 1, 0 6 6, 5 2 8	団体加盟費 8 0, 0 0 0
本部会費 1 2 7, 5 0 0	事務所使用料 3 6 0, 0 0 0
本部運営分担金 7 4 5, 0 0 0	事務諸経費 4 7, 0 0 0
寄付金等収入 5 5 0, 0 0 0	通信・発送費 3 5, 0 0 0
広告収入 6 0, 0 0 0	機関誌等印刷・編集費 5 2 0, 0 0 0
	会議費 1 4 0, 0 0 0
	旅費交通費 3 0 0, 0 0 0
	予備費 5 0, 0 0 0
	次期繰越 1, 0 1 7, 0 2 8
合 計 2, 5 4 9, 0 2 8	合 計 2, 5 4 9, 0 2 8

誰もが自立して生きられる社会を目指して

～ 2009 年度 年間活動方針 ～

□頸損者へのセルフヘルプ、ピアサポートを積極的に実践

- ・各支部間の交流、支部のない地域での出張活動・招待活動等

□頸損者の抱える問題を共有化し、問題解決の道を具体的に探す

- ・代表者会議、支部交流、頸損交流によって問題の共有化を図る

□頸損者への情報提供をより充実させる

- ・機関誌・HPの内容充実、「頸損解体新書（2008）」（仮）を広く広報等

□障害の枠を超えた各分野との交流・活動

- ・日本リハ工学協会、大学・専門学校・高校など、メーカー等との交流等

□他団体との統一行動

- ・権利保障・介助、交通・まちづくり等の課題を協力して要請行動等

■全体活動指針

◎「セルフヘルプ」「ピアサポート」及び「情報収集と提供」を積極的に行う。

◎全国各支部間の連携体制を強化すると共に、頸損ネットワークの拡大を目指す。

◎頸髄損傷者の抱える課題を掘り起こし、解決を目指す。

◎当事者不在の制度改革が無いように、各々が学び、意見発信する。

■分野別活動課題

●障害者の権利保障

◎「障害者権利条約」の批准と、障害者の権利が保障される国内法の整備を求める。

●介助制度

◎重度障害者の自立生活が十分支えられる普遍的な制度を求めていく。

●交通・まちづくり

◎「いつでも、誰でも、どこへでも」自由で、安全に移動できる社会環境を求める

◎移動制約者の「移動および利用の権利」が保障されるように求める。

◎公共交通事業者に安全でスムーズな移動環境の整備、接客サービスを求める。

●福祉用具（補装具・日常生活用具）

◎ユーザーの視点に立った製品開発を求め、開発にも積極的に参画していく。

◎自立を支えるために必要な機器が、的確・迅速に入手できるように求める。

◎必要不可欠な高機能製品が、高額な負担を強いることなく入手できるように求める。

●医療

◎質の高い医療、リハビリサービスが適切に受けられる制度や病院の設置を求める。

◎人工呼吸器使用者の、呼吸管理を指導できる専門家の養成を求める。

●住宅環境

◎重度身体障害者が円滑な日常生活を営める公営住宅（単身・世帯）の増設を求める。

◎民間住宅を借りる場合の支援サービスの充実を求める。（保証人問題、改造費用）

●所得保障・就労

◎年金および諸手当によって、生活を賄える給付水準となるよう求めていく。

◎無年金障害者問題の根本問題解決に協力する。

◎重度障害者の就労促進のために、就労環境の整備を求めていく。

総会を主催した側から 岐阜大会実行委員

今回の岐阜大会を行うにあたって実行委員会を結成し約1年に亘って準備をしてきました。

まず、最初に会場探しでした、全国からのアクセスなどを考え岐阜駅周辺で行う案で探し始めましたが1つ目の壁が、交流会が行えるだけの広さの会場と1つのホテルでは宿泊を希望されると思われる数だけの部屋が確保できないことでした。

それでも、広くはありませんでしたが交流会が行なえるホテルが見つかり、隣のホテルでも部屋が確保でき、宿泊を2つのホテルに分散することにし、片方のホテルで交流会を行うことにしました。

シンポジウムは上村さんが手配して下さって岐阜駅施設の会場を使用することに決まりました。

次に、運営資金で2つ目の壁が、当てにしていた助成が駄目になり他で賄う必要がでてきました。

他の助成を探したり、実行委員全員が企業などに協賛やカンパをお願いしたりして、最終的には少しは集めることができました。

年が明けてからは、実行委員会の活動も忙しくなり、大会用に作られたメーリングリストでの連絡も頻繁になりました。

もちろん、その前も講演の依頼、資金集め、ボランティア募集、岐阜駅会場とホテルの移動などの打ち合わせの連絡はしていましたが・・・。

大会が近づくに伴って、参加申込の集約、ホテルの割り振り、会場のレイアウトなども行わなければいけないので、実行委員の皆さん自分の担当した仕事で大忙しでした。

4月に入ってから、事前の準備から大会当日のタイムスケジュールに従っての役割や動きの確認など、毎週会議を行いました、それでも大

会前日まで慌しくなりました。

大会当日をむかえ、あいにくの雨になってしまいましたが、大会を企画するときに雨も想定して移動ルートを検討していたので、移動であまり濡れなくてすんだのではないかと思います。

シンポジウムや交流会も反省する点は幾つかありますが、沢山の方に参加していただき、大会も何とか無事終了実行委員の皆さんもほっとしていました。



大会を終えて記念撮影

終りに

今大会では、実行委員は14人で運営して来ましたが、実行委員だけではもちろん運営が出来なかったです。

頸損の会員以外の沢山の方に準備段階からご協力していただき、大会当日もボランティアや実行委員以外の頸損会員の方の協力があったからこそ無事終えられました。

裏方でも今大会のテーマのように人との出会い、繋がりがよりいっそう深まったと思います、これを大切にこれからも頸損連絡会の活動を歩んでいきたいと思います、本当に皆様ありがとうございました。

頸損連絡会との出会い…そして出会い

頸損連絡会・岐阜 森部 晶子

皆さん、はじめまして。頸損連絡会・岐阜の森部 晶子と申します。

今回、全国機関誌の原稿依頼を受け、何を書いたらいいのか？ととても迷いました。文章を書くのも苦手ですが、何とか頑張って、このテーマならということで、頸損連絡会との出会いについて、書かせて頂こうと思います。

私は、名古屋市に住んでいます。名古屋の人が何故？とよく言われます。きっかけは、私が交通事故で、入院していた同じ病室に、岐阜出身の女性がいました。年齢も近かったので、すぐに仲良くなりました。その女性が、岐阜支部の会員だったのです。彼女の紹介もあり、今から10年くらい前に、頸損連絡会に入会することになりました。

頸損連絡会に入会して色々な人との出会いがあり、そして今年は、5月16.17日に、全国大会がありました。岐阜支部は、9年ぶりとのことだそうです。私は、9年前は不参加でしたので、今回が初めてでした。

会計をやっていることもあり、実行委員にも選ばれました。私の担当は第2部のファッションショーになりました。この企画は、今回着付けでお世話になった坂先生の“障害がある人にも着物を着せてあげたい”

“着物を着て楽しんでもらいたい”という強い思いからのものでした。岐阜の会員から、私を含め3人の女性選ばれました。どんな着物を着るのか？

ファッションショーは、どのように進めるのか？音楽は、どんな曲にするのか？

何回も何回も打ち合わせをして、色々な人の協力もあり、当日を迎えることができました。



ファッションショー（前列右が筆者）

車椅子で着物を着るといって、きっと皆さんは、いろんな疑問を持つと思います。着物は、どうなってるの？分割されてるの？障害者用の着物なの？

着るときは、どうやって着るの？寝ころんで着るの？とハテナがいっぱい。

では、謎解きをしますね。

着物は、分割されているわけでもなく、障害者用の着物でもありません。健常者が着る着物と同じです。着方は、まず着る人は、別の椅子に移動します。

その間に、車椅子に着物を敷きます。出来たら、着る人が車椅子に戻ります。

車椅子に乗ったまま、着付けをしてもらいます。

ファッションショーでは、髪の毛もセットしてもらいました。着付けも素敵にして頂きました。男性のデルさん（健常の人）も頼み、男性も羽織・袴姿で、それぞれペアになり、車椅子を押してもらいました。

当日参加された方より、たくさん写真を撮ってもらい、まるで、スターになった気分楽しく終えることができました。

このファッションショーを通じて、車椅子でも、着物を着て楽しむことができるということを、身近に感じてもらえれば幸いです。

着付けをして下さった坂先生に出会えたことに、感謝しています。

第2部最後のイベントに、一五一会のギター演奏がありました。
その演奏にも私は、出演しました。



一五一会ギター演奏

このギターは、岐阜県可児市にあるヤイリギターという所で作られたもので、歌手のビギンさんや藤井フミヤさんが、使っているものだそうです。

ギターとの出会いは、今から5年くらい前、アクティブGに展示されたことがきっかけでした。このギターの特徴は、普通のギターの弦が、6本と違い、4本なんです。

これなら、障害があっても簡単に弾けるかもしれないという思いから、上村やよいさんが、ヤイリギターの社長の協力を得て、社員の人を講師に迎え、メンバーを集め、練習を始めることになりました。

私は、このメンバーに誘われた時、ギターは、弾いたことがなかったので、弾けるかどうか心配で迷いましたが、音楽は、好きだったので、やってみることにしました。当初は、少人数で始めたんですが、今では、オンリーワンズというグループができ、人数も徐々に増えて、現在に至ってます。

メンバー1人1人の障害の度合いは、まちまちなので、一つの曲を一人で弾くことは、難しくても、何人かの仲間が集まれば、一つの曲を完成させることができます。それこそが、音楽の素敵な所でもあり、楽しさだと思います。

音楽を通じて、出会えた仲間とともに、これからも、感動を皆さんに伝えていきたいと思っています。

最後に、今まで出会った人たちを大切にしたいという思いとともに、これからは、一緒に楽しみを共有できるパートナーに出逢いたい。

それが、今の私の夢です。

お役立ち？！

東京頸損連絡会 鴨治慎吾

今回は、夏お役立ち？グッズ？を集めてみました。

★ヌーブレラ【ブラック】【クリア】 12600 円



「強風でも折れない傘」それを実現しようと生み出されたのがヌーブレラ。頭部全体をカバーしてくれるので、とにかく濡れない。

そして、強風の寒さも防備。寒さにも負けない。手を使わなくても使えてしまうのも魅力的。たとえば、どんな強風であっても大丈夫！

<http://www.nubrella.jp/#top>

株式会社アウェイカーズ 03-6226-6393

★ソーラーキャップ 1000 円～



ソーラーパネルで作った電気を使って、帽子のツバ部分にあるファンが回転します。太陽の下にいるかぎり、涼しい風を送り続けてくれます。日差しの強さによって、ファンの回転が変化し、その時々心地の良い風を演出してくれます。太陽の光を遮りつつ、体温の上昇を防ぐ働きは熱射病予防にどうぞ！！

<http://www.plata.co.jp/items/sc002.html?gclid=CLyD38vAi5sCFZgtpAodx1TwrQ>

(プラタの直輸入ショップ) 0120-341-565

★Eco&Cool2way 冷んやりバンド 780 円～



水道水を満たした洗面器などの容器に約 10～20 分ほど浸すだけで、給水ポリマーが水をたっぷり保水。冷んやりバンドが触れている部分の体温上昇を抑えて、冷感を 24 時間持続させます。

<http://store.shopping.yahoo.co.jp/ishino7/20090529-san03.html> (Ishino オンライン)
082-234-6322

★アイスジェルパッドPCM-5006AP 7,980 円



ジェルの熱交換作用により夏の暑いカラダを冷ましてくれます。また、優れた低反発性で体を優しく支えます。

<http://store.shopping.yahoo.co.jp/ishino7/20090516-5006ap.html> (Ishino オンライン)
082-234-6322

ホームページの掲示板に書き込まれた頸髄損傷者の温熱環境に対する意識

東京頸髄損傷者連絡会 三上功生（東京理科大学）

1. はじめに

前号、前々号で述べましたように、人工気候室実験により頸髄損傷者（以下頸損者）の体温調節機能の特性のおおよそは把握することができました。しかし、頸損者が実際の日常生活の中で、温熱環境に対してどの様な不満・不安或いは要望を持ち、またどの様に対処しているのかは、不明な点が多いのが実状でした。そこで、これらについて平成16年に全国頸髄損傷者連絡会、全国脊髄損傷者連合会、日本せきずい基金の会員を対象として、ホームページの掲示板による書き込み調査を行いましたので、その結果について報告します。

2. 調査概要

調査方法は、平成16年1月に全国頸髄損傷者連絡会の北海道、栃木、東京、神奈川、岐阜、京都、大阪、兵庫、愛媛の9支部、高知頸髄損傷者連絡会、広島頸損ネットワーク、全国脊髄損傷者連合会の全47都道府県支部、日本せきずい基金のホームページの掲示板に、日常生活での温熱環境に対する不満・不安、対処方法、要望について、回答依頼の書き込みを行いました。その結果、平成16年3月までに20名から回答を得ました。表1に回答者のプロフィールを示します。回答者のほとんどが頸損者でしたが、2名の胸髄損傷者（以下胸損者）と1名の腰髄損傷者（以下腰損者）が含まれています。胸損者、腰損者は、頸損者より麻痺領域が狭いため、彼らの回答内容は、頸損者にもあてはまるものと考え、調査結果の整理には、胸損者、腰損者の回答内容も含むことにしました。

表1 回答者のプロフィール

回答者	性別	損傷レベル	麻痺の程度
A	男	C5	完全四肢麻痺
B	男	C4	完全四肢麻痺
C	男	T4	完全対麻痺
D	男	C3	完全四肢麻痺
E	男	C5	完全四肢麻痺
F	男	不明	不明
G	男	C5	不全四肢麻痺
H	女	T11	不全対麻痺
I	男	C4	完全四肢麻痺
J	男	C6	不全四肢麻痺
K	男	C7	完全四肢麻痺
L	女	C6	完全四肢麻痺
M	女	C5	完全四肢麻痺
N	男	L1	不全対麻痺
O	男	C5	完全四肢麻痺
P	男	C4	完全四肢麻痺
Q	男	C4	不全対麻痺
R	男	C5	不全四肢麻痺
S	男	C4	不全四肢麻痺
T	男	C5	完全四肢麻痺

3. 調査結果

表2に掲示板に書き込みされた回答内容を示します。不満・不安については、夏期冷房への回答が多く、その中でも冷風による体の痛みやしびれを訴えるものが多くなっていました。要望の中に「部屋の垂直温度分布、水平温度分布は均一に、かつ無風が好ましい」との回答があることから、これらの回答は頸損者にとって望ましい冷暖房機器開発に一示唆を与えています。また、公共施設や公共交通機関の冷暖房に対する不満・不安も多くなっていました。このことは、公共施設や公共交通機関が、いまだ頸損者にとって熱的に不快な空間が多いことを示しているとともに「耐暑性、耐寒性の個人差が大きく、病室内の温熱環境の設定についてもめる」、「職場の温度調節でもめる」、「他人にとって冷暖房共に効き過ぎと思われる位がちょうどよい」という回答が見られることから、公共施設や公共交通機関の温熱環境設定の難しさもうかがわれます。以上より、冷暖房に対して不満・不安を抱いている頸損者が多いことから、頸損者にとって望ましい冷暖房のあり方を早急に模索する必要があります。対処方法については、夏期外出、うつ熟、夏期冷房、冬期暖房、冬期衣服・寝具への回答が多くなっていました。夏期外出時は、「霧吹き、おしぼり、冷水、氷が必需品である」や「冷房のないところに行く時は、冷却

用バンダナを首に巻く」との回答があり、うつ熱についても、冷水、氷、濡れタオル、氷枕の使用や、水、清涼飲料水、アイスクリームの頻繁な摂取など、頸損者各々が経験的に考案していることがわかります。夏期冷房については、冷房能力の高いエアコンの使用、長時間冷房、トイレ・脱衣所への冷房機器の設置により暑さに対処しています。寒さ対しても同様に、暖房能力の高いエアコンの使用、長時間暖房、自室での複数の暖房機器の使用、マルチ型暖房機による複数室の暖房、トイレ・脱衣所への暖房機器の設置などに加え衣服を重ね着し、厚着をすることにより対処しており、特に下半身の冷えに注意している傾向が見られます。以上のように、対処方法は個別性が強いですが、サンプル数を増加させ、損傷レベルや体温調節機能障害の程度により、対処方法に違いが見られるのか調査する必要があります。要望については、衣服、冷暖房機器、公共施設の空調、車椅子に対してなど様々なものがあり、頸損者が日常生活の中で体温調節機能障害により被るリスクを軽減させるためには、様々な分野からの研究アプローチが必要であると考えられます。

表 2 掲示板に書き込まれた回答内容

不満・不安	恐怖感が強く、見えない熱源には 気を使う。(A)	◎ベッドと接する背中が熱を持つ ので、自然素材のゴザを敷く。 (G)	◎足もとが冷えるので、レッグウ ォーマーとひざ掛けは必需品であ る。(L)
【夏期】 「暑さ」 ◎麻痺部ではない正常部分に大量 発汗し、その汗が冷えて寒い。 (C) ◎脱水症状(熱中症?)になり、気を 失いそうになってから暑さに気づ く。(C) ◎のぼせて、意識がもうろうとす る。(J) ◎発汗障害でも低湿度環境は耐え られるが、暑さに加えての高湿度 環境は苦手である。(M) 「冷房」 ◎冷房により下半身が冷えすぎて も気づかずに、下痢をする。 (H) ◎エアコンの冷風は肌に差し込む 感じがして好まない。(D) ◎エアコン、扇風機の冷風に当た ると関節が痛む。(L) ◎手足が冷風に当たると痛みを感 じる。(R) ◎冷風は無感覚の部分で痺れさせ る。(G) ◎冷風に当たると筋肉が硬直し痛 くなる。(S) ◎冷房の効きすぎた電車や公共施 設は、長時間いると関節が痛みつ らい。(L) ◎冷房が効きすぎている施設が多 く困っている。(H)	【夏冬両期】 「冷暖房」 ◎個別の環境制御が出来ない冷暖 房設備を設置している公共施設は 困る。(M) ◎新幹線の個室の空調がうまく効 いていないことが多い。(M) ◎耐暑性、耐寒性の個人差が大き く、病室内の温熱環境の設定につ いてもめる。(L) ◎職場の温度調節でもめる。 (K) ◎他人にとって冷暖房共に効き過 ぎと思われる位がちょうど良い。 (K) 【その他】 「気圧変動」 ◎気圧変動により、麻痺部が痛ん だり痺れたりする。(J) ◎低気圧が近づく時、体が痛み激 痛になることがある。(S) 「衣服、寝具」 ◎衣服量、布団量の変化による体 温の変動が激しい。(C)(G) 「生活行動」 ◎体温調節機能障害の影響で、夏 冬の行動範囲が家の内外で狭くな っている。(K)	◎冷房能力の高いエアコンを使用 している。(E) ◎1日中冷房を行う。(F) ◎トイレに冷房設備を設置してい る。(F)(H) ◎風呂場の脱衣所を、冷房してい る。(P) 「衣服、寝具」 ◎窓を開けて寝るのは厳禁で、掛 け布団は絶対必要である。(G) ◎冷房による下半身の冷えを防ぐ ためにズボンをはき、ひざ掛けを している。(H) 【冬期】 「外出」 ◎外出は暖かい昼頃にしている。 (H) ◎外出の際はカイロを使用し、熱 い飲み物も効果的である。(L) 「暖房」 ◎暖房能力の高いエアコンを使用 している。(E) ◎1日中暖房を行う。(F) ◎自室の暖房は、エアコンと足も とを暖める電気ストーブを使用し ている。(H) ◎石油型温水循環装置で、複数室 の暖房を可能とした。(J) ◎ガスファンヒーターにより、ほ とんどの部屋を暖房している。 (N) ◎ストーブと電気敷毛布で体温を 36℃台に調整している。(T) ◎トイレに暖房設備を設置してい る。(F)(H)(J)(Q) ◎風呂場の脱衣所を、暖房してい る。(P) 「衣服、寝具」 ◎下半身の冷えを防ぐためにズボ ンをはき、ひざ掛けをしている。 (H) ◎とにかく厚着をする。(E) ◎タートルネックの衣服により顔 下まで保温し、さらに耳も保温す る。(O) ◎重ね着をするが、動きにくさを 考慮して、薄手のものを何枚も着 る。(L)	◎ベッドでも体温が36℃以下にな るので、電気掛け毛布を使用し、 肩、腕を冷やさないように2、3枚 重ね着する。(R) 【夏冬両期】 「外出」 ◎1人で外出する時は、空調の効 いてない所には行かないようにし ている。(C) 「その他」 ◎体感の似ている人に、今寒いか 暑いかと時々尋ねる。(C) ◎家にいる時は、こまめに温度計 を確認する。(C)
	対処方法		要 望
【冬期】 「寒さ」 ◎一度下半身が冷えてしまうと、 なかなか温まらない。 (H)(J) ◎気持ちが悪くなるまで、寒さに 気づかない。(C) ◎厚着をするにもかかわらず体が 冷えすぎて体調が悪化することが ある。(D) 「暖房」 ◎会議室などの複数人在室する部 屋にいと、上着を1枚羽織って も寒いことがよくある。(L) ◎ビルの中は暖かくても、トイレ が寒いことが多い。(M) 「火傷」 ◎外出時、カイロは低温火傷が心 配で使えない。(R) ◎感覚麻痺のため、火傷に対する	【夏期】 「外出」 ◎外出には霧吹き、おしぼり、冷 水、氷が必需品である。 (L)(A)(F)(Q) ◎冷房がないところに行くときは 冷却用のバンダナを首に巻く。 (H) ◎外出は涼しい時間帯にし、外気 との接触を避けるためタクシーか 自家用車を利用する。(H) 「うつ熱」 ◎うつ熱時は、冷房やアイスノン で首や腋下を冷やし、冷水、氷を 摂取する。(L) ◎上半身に濡れタオルを広げ、遠 くから冷風をを当てることにより 体温上昇を防ぐ。(T)(G) ◎1日2リットルの水を飲み、清涼 飲料水やアイスクリームを多く摂 る。(K)	◎石油型温水循環装置で、複数室 の暖房を可能とした。(J) ◎ガスファンヒーターにより、ほ とんどの部屋を暖房している。 (N) ◎ストーブと電気敷毛布で体温を 36℃台に調整している。(T) ◎トイレに暖房設備を設置してい る。(F)(H)(J)(Q) ◎風呂場の脱衣所を、暖房してい る。(P) 「衣服、寝具」 ◎下半身の冷えを防ぐためにズボ ンをはき、ひざ掛けをしている。 (H) ◎とにかく厚着をする。(E) ◎タートルネックの衣服により顔 下まで保温し、さらに耳も保温す る。(O) ◎重ね着をするが、動きにくさを 考慮して、薄手のものを何枚も着 る。(L)	◎厚着は車椅子、トイレ動作を困 難にするため、冬暖かく、夏涼し く感じる薄手の着衣が欲しい。 (A) 「冷暖房機器、温熱環境設定」 ◎部屋の垂直温度分布、水平温度 分布は均一に、かつ無風が好まし い。(F)(H) ◎夏期エアコンをつけ続けている と体調がだるくなり、ON/OFFが 大変になるので、身体負担の少 ないエアコンがあればよい。 (P) ◎車中の冷暖房は調節が大変なの で工夫が欲しい。(P) 「公共施設の空調」 ◎公共施設のトイレにも、暖房設 備をつけて欲しい。(L) 「車椅子、ハードウェア」 ◎冷暖房完備の車椅子が欲しい。 (R) ◎外出で車椅子に乗った際、何か で暑さ、寒さから防護できればよい。 (P) ◎自分で運動が出来ないので血流 が悪く、下半身の運動が出来るよ うな器具があるとよい。(R) 「その他」 ◎介助者は、暑さ、寒さの変化を 感じたらすぐに教えて欲しい。 (C)

この記事は大阪頸損連絡会機関誌
『頸損だより』（No.109）より、
許可を得て転載したものです。



それぞれの 体温調整の工夫

～頸損者にとっての温熱環境と体温のコントロール～

頸髄を損傷すると発汗機能が麻痺し汗をかかなくなります。そのため夏場は体温が上昇し、そのまま冷やさずに放っておくと最悪の場合熱中症など生命に危険な状態になる恐れがあります。また感覚麻痺のため外気の温度変化を感じにくく、冬場は気がついたら体が冷えているというようなことも起こりがちで、寒さにも弱い場合が多いです。

そのため多くの頸損者は独自の方法で体温のコントロールを行っていますが、他の頸損者がどんな工夫をしているかということは意外と知る機会がないものかと思います。そんな情報を今回一堂に集めてご紹介いたします。皆さんの参考になれば幸いです。

【桜井 龍一郎】

1. 体温調整 季節ごとの工夫

ここでは、何人かの頸損会員が春夏秋冬の季節ごとや、外出時そして家の中で体温調整するためにどんな点に注意しているか、どんな工夫をしているか紹介します。
(あくまで方法の良し悪しではなくその人のありのままの方法を紹介しています。)



Aさん
手動車椅子



Bさん
電動車椅子



Cさん
ベッド



Dさん
電動車椅子



Eさん
電動車椅子



Fさん
簡易電動



Gさん
手動車椅子



Hさん
簡易電動



Iさん
電動車椅子



Jさん
呼吸器使用



Kさん
呼吸器使用



Lさん
電動車椅子



Mさん
呼吸器使用



Nさん
手動車椅子



Oさん
電動車椅子

春



秋



【Cさん】室温に応じた毛布類の使い分けをしています。除湿をかけてサラッとさせます。

【Dさん】春秋という季節の変わり目は、その日によってかなり気温差がありますので注意しています。シャワー浴や清拭の時は室温を26度ぐらいにしています。

【Hさん】春秋は寒さ対策として首に何かを巻くようにしています。

【Iさん】この季節が厄介で、毎年のように体調を崩し長く熱を出していましたが最近では、少しでも寒くなったら暖房、暑くなったら冷房、場合によっては暖房を切ってすぐに冷房ということもありますが、これが自分にとって体調を崩さない一番良い方法だと辿り着きました。

【Mさん】基本的には服の調整ですが、寒ければカイロを貼ります。

【Nさん】春秋はなるべく寒くならないように温めの格好で出かけます。暑ければ脱げば良いので。

夏



【Aさん】外出時は氷を食べたり、首にぬれタオルを巻いたりします。あとストローハットをかぶっています。家の中ではエアコン、扇風機です。

【Bさん】日焼けや体が火照るのを防ぐため、またクーラーの冷やしすぎ防止のため、あえて長袖のTシャツを着ています。ツバのある帽子をかぶったり、日陰を通ったりして直射日光を避けています。顔や首や腕に霧吹きで水をかけたり、ジップロック（水が漏れないチャック式のビニール袋）に水を入れて凍らせたものを首にあてたり、さらに、溶けた冷たい水でタオルを濡らし首に巻いたりもしています。

【Cさん】家にいることが多いです。冷房やタオルケットの厚みで調節します。アイスノンを使うこともあります。

【Dさん】ベッド上では、タオルケットの掛け具合で調整します。夏場は体温が上がりだすと、どんどん上がっていきますので、体温を低めに維持するよう心掛けています。35度台後半、35.9度ぐらいです。

【Eさん】衣服は半袖ですね。水分を1日3～4リットル補給して尿から熱を逃がすようにしています。私の場合、関節を動かす運動をおこなうと案外熱が下がったりします。かき氷を食べることもあります。

【Gさん】外出時は部屋のエアコンにタイマーをセットしておいて、帰って来たら部屋が冷えているようにしています。扇子、それから水冷襟巻や携帯用の扇風機を持っていったりもします。熱冷ましシートは私にはあまり効果がなかったです。

【Hさん】凍らせてタオルに巻いたペットボトルで体を冷やします。

【Iさん】クーラーの温度を低めに設定して、氷のうでおでこを冷やしています。

【Jさん】霧吹きが苦手なので、熱冷ましシートを多用しています。

【Kさん】空調ベッド「風眠」というものを使用しています。シーツの下に敷き込んで風を送るので背中に熱がこもりません。

【Lさん】外ではもっぱら冷水スプレー、家ではアイスノンとエアコンです。

【Mさん】暑くなりすぎると脇に氷枕を挟んでいます。

【Nさん】霧吹きで冷やしています。外ではなるべく熱がこもる前にこまめにコンビになどで体を冷やします。

【Oさん】熱冷ましシート、叩けば一瞬で氷の塊になるような冷やしグッズは必ず携帯して外出します。

冬



【Aさん】外ではマフラー、帽子、膝掛け、レッグウォーマー、家ではエアコン、ファンヒーターを使います。

【Bさん】服を4～5枚程着込んで、外出時にはそれにダウンジャケット、マフラーを加えます。下半身はひざ掛けをひざに巻きます。ベッド上では電気毛布を使います。

【Cさん】電気毛布で調節しています。

【Dさん】体温を高めに維持しています。36度台前半です。体温が下がりだすと一気に35度台前半まで下がるので、その場合ストーブで部屋の温度を上げます。室温が20℃より下がらないようにしています。

【Eさん】首筋から耳元に寒さを感じるため、ハイネックセーターやネックウォーマーを着用します。足にはレッグウォーマーを履きます。ストーブやファンヒーター、それでも寒いときはハロゲンヒーターやカイロを使います。加湿も欠かしません。あと寒い日は温かい飲み物や食べ物を摂取します。

【Fさん】エアコン、床暖房で部屋を暖めます。ダウンベストを着たり、入浴やお酒で体を温めたりします。

【Gさん】暖房や重ね着のほか、とくに寒いときはハロゲンヒーターを使います。山岳用の防寒インナーやハイソックスは暖かいですよ。カプサイシン入りのサポーターも使っています。外出時はジャンパー、パーカー、ジャケット、セーター、マフラーを寒さに合わせて使い分けます。また、エアコンのタイマーをセットして部屋を暖めておきます。

【Hさん】こまめに足浴をします。

【Iさん】ファンヒーターと加湿器のほか扇風機もつけます。こうすることで夏も冬も同じ環境を保てます。

【Kさん】ベッド上では服を腹背逆にして着ています。部屋の温度調整は、エアコン、ガスファンヒーターなどで、操作は両親と介護人にやってもらっています。

【Mさん】タオルケットにカイロを貼ります。

【Nさん】パッチを使っています。体が冷える前に対応するようにしています。

【Oさん】いわゆる“ババシャツ”を着用しています。ニット帽は欠かせません。風の冷たい日は頬と口をマフラーでガードします。外出前には温かいものの摂取や暖房で体を温めておきます。

家の中で



【Dさん】体温計と寒暖計を見ながら冷暖房器具、布団、電気毛布で調節します。冷たいジュースやホットコーヒーなどで体の内部からも調整します。

【Eさん】温湿計をチェックして事前に対処するよう心掛けています。

【Kさん】室内の空気を換気する時は、直接、部屋の窓を開けないで隣の部屋の窓を開けます。室内の温度と湿度の急激な変化に気をつけています。

【Mさん】夏は暑すぎたらエアコン、氷枕を使用し、冬はストーブやカイロを使用します。

【Oさん】冬の場合、長時間部屋を暖めたい場合はオイルヒーター、即効性を求める場合はファンヒーターと使い分けています。どさらに大急ぎで暖めたい場合は電気ストーブを顔に近づけます。首にマフラー、タオルを巻くだけでも保温効果はかなり高まります。夏はアイスノン最低3つは凍らせて用意しています。

外出時に



【Dさん】カイロと冷えピタは必需品です。体温計を一つ持ち歩いています。冬の外出時は、重ね着は窮屈なので寝袋を普通のものとは極寒地タイプのもので2種類使い分けています。寝袋の中は薄手の長袖シャツ一枚だったりします。

【Eさん】夏は霧吹き、団扇、冬は防寒着、ネックウォーマー、ニットキャップ、カイロを使います。

【Fさん】夏は霧吹き、あと直射日光を避けます。冬は貼るカイロは欠かせません。セーター、ジャンパー、マフラー、帽子を使います。

【Hさん】なるべく水分を摂取するようにしています。衣服の着脱はひとりでは難しいので悩めますね。

【Iさん】すごく寒いときは防塵マスクをつけます。暑いときはビニール袋の中に氷を入れて首の後ろに巻きつけます。氷が溶けたらスーパーの食料品売り場に行って調達します。

【Jさん】夏は熱さまシート、冬はマフラー、カイロを持って出ます。夏冬共に水分補給を心掛けています。

【Kさん】極力温度変化の少ないところを移動するようにしています。

【Lさん】冬は通勤時に首に”ゆたぽん”の首肩用を使っています。

【Mさん】なるべく屋外には長時間いないようにしています。

【Oさん】冬、外出前に鍋焼きうどんや味噌汁を食べ、暖房の温度を上げ毛布をいっぱいかぶったまま、車椅子に移乗するまでに”こもり熱”を蓄えておいてから出かけます。夏、暑いときはコンビニとかスーパーの冷凍食品売り場に避難します。コンビニなどで氷を買ってタオルに巻きます。

2. 体温調整で皆が使っているグッズおよび製品紹介

☆ 身体を冷やす ☆



■ 冷えピタ (ライオン株式会社)

水分たっぷりのジェルで、朝までひんやり 8 時間冷却。シートにたっぷりと含まれた水分の気化熱により、高い冷却効果が約 8 時間持続します。だから朝までひんやり。貼りかえる手間が省けます。粘着力が強く、しかも皮ふ刺激の少ないポリアクリル酸系粘着付与剤を配合。



■ 冷えピタ ボディ用 (ライオン株式会社)

熱が高いときはわきの下、首すじ、を冷やすのが効果的。
朝までひんやり 6 時間冷却。



■ アイスノン ソフト (株式会社白元)

新・柔軟 2 層構造！凍らないからやわらかい不凍ゲルと 4 包構造で曲がってフィットする凍結ゲルでソフトな感触で長時間使用できます。

くりかえし使用できます。



■ 首用アイスノン (株式会社白元)

首もとにピッタリフィットする特殊形状、冷凍してもカチカチにならないソフトな感触、冷たさは約 60 分間持続します。(外気温や使用環境により持続時間は異なります。)洗える専用カバー付きです。くりかえし使用できます。



■ 熱さまシート (小林製薬株式会社)

熱さまシートに含まれるたっぷりの水分が熱を吸って蒸発するので、8 時間後でも変わらず皮ふの温度を -2°C 冷やし続けます。つぶつぶの『冷感カプセル』を配合しています。冷たさがあとからじわじわ効いて、冷感を長く保ちます。



■桐灰レイカ・冷却用品

(桐灰化学株式会社)

パチンとたたいて急速冷却、再利用可能(再使用方法をよくお読みください)。発熱・打身・ねんざ・やけどなどの応急処置に、魚つり、ドライブ、ハイキング等レジャーのお供に、熱いときのスポーツ観戦・スポーツ後の汗おさえなど冷却用としては幅広くご使用ください。

■ふりふり氷スプレー

(桐灰化学株式会社)

タオル等にスプレーするだけで、約-30℃の氷状になる冷却スプレーです。ほてった肌にあてるだけでヒヤッとクールダウンします。



■スパイダーマン扇風機付き霧吹き

(USJにて)

下の赤い部分に水を入れて、扇風機を回しながら顔に「シュ！」っと霧吹きで水をかけるとめっちゃすずし〜。扇風機が回ってるときに手や指がプロペラ部分にあたっても、まったく痛くないようにできていて、簡単にとまるので小さな子供にも安心。

■携帯用ミストファン

(フカダック株式会社)

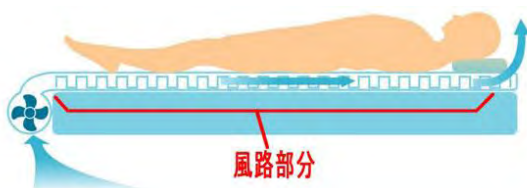
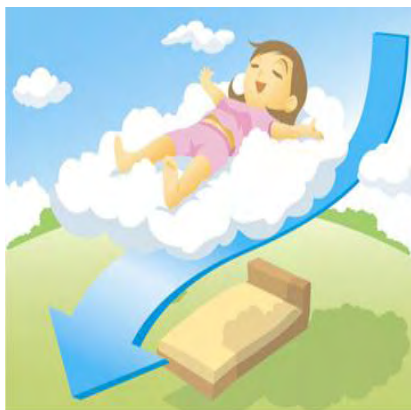
羽根は柔らかい素材なので、お子様でも安心してご使用頂けます。携帯に便利な首かけひも付き。携帯できるスティックタイプで、旅行や外出時に最適、持ち運びもラクラク、霧吹き付き、気化熱でヒンヤリ感アップ。

■くまのプーさん扇風機付き霧吹き

(ディズニーランドにて)

ゴム製のプロペラなので、扇風機としての威力は小さいです。





■霧吹きと製氷皿

ごく普通の霧吹きです。氷は普通の製氷皿やと大き過ぎるので、1cm角くらいの小さな氷が作れる製氷皿を使っています。他にも、細い棒状の氷が作れる製氷皿も売っています。

■水冷襟巻「サーモメイト」(ミズノ)

中層の吸水繊維が水を吸着膨張し保水します。その水が気化する際の吸熱作用で内部の熱を奪い、皮膚表面から温度上昇を抑えます。熱暑、高温環境で着用することにより、体力エネルギーの浪費を抑え、身体への負担を軽減し、熱射対策品として最適です。強い陽射しの下で、アウトドアスポーツで、首すじからクールダウン。長さ 72cm。吸放湿&吸汗発散のダブル効果。ニューセラミックを練り込み赤外線、可視光線、紫外線の進入を防ぎます。

■空調ベッド「風眠」(株式会社空調服)

夏寝苦しい最大の要因は、マット(布団)に寝ていると、体の体温や湿気でマットがぬくもってしまい、マットに接している体の部分からの放熱ができなくなるためです。

これを解決するための最大の決め手は、体がマットに接していない、すなわち宙に浮いている事です。体を宙に浮かし、更にマットと体の間に風が流れていれば、暑さによる寝苦しさは完璧に解消されます。

研究の結果、体重を支えしかもクッション性を損なわない“スーパースペーサー”技術と、体を浮かした空間に送風する風路技術によって、夢のベッド“空調ベッド”(正確には、ベッドの上にひいて用いるもので、空調マットと言うべきかもしれませんが、以降の説明でも空調ベッドと称します。)が製品化した。空調ベッド風眠は生理クーラー理論に基づいたものです。ただし空調ベッドには暖房機能はありません。

☆身体を温める☆



■ゆたぼん首肩用(株式会社白元)

電子レンジでチンするだけで、心地よい温かさになります。首や肩にやさしくフィットするジェルタイプです。温かさは約30分持続します。(外気温や使用方法により異なります。)洗える専用カバー付きです。くり返し使用できます。



■カプサイシン入りサポーター

ウォームスリーブ(神戸生絲株式会社)

ホット機能サポーター、ひざ用。シルクコーティングで機能も肌ざわりもアップ、とうがらしの成分配合、とうがらしの温感成分カプサイシンが皮膚表面の水分に反応し、毛細血管を刺激して血行を促進するため温かさを感じます。



■桐灰カイロはる くつ下用うす型

(桐灰化学株式会社)

足の上からはるから、あたたかさが伝わる。違和感がない。

【持続時間】8時間

【最高温度】44℃

【平均温度】37℃

<消臭剤入り>



■ぬるホッカイロ 温感クリーム

(株式会社白元)

おでかけ前や寝る前にぬるタイプの温感クリームです。保湿成分(ラベンダーエクス)配合でカサカサお肌を守ります。



■吸湿発熱素材、吸汗速乾素材インナー 「ヒートテック」(ユニクロ)

着心地感のいいストレッチ素材、吸湿発熱素材「ヒートテックセンサー」採用、消臭及び防かび性能。

ヒートテックセンサー：吸湿発熱性を持つ素材で、おもにインナー用に使われます。身体から出る湿気(汗)をウールの3倍の発熱量で熱に変換することで、身体を暖かく包み込みます。また、表側に吸汗速乾素材「アクアテルス」を併せて使うことで、かいた汗をスムーズに拡散し、ウェア内部の蒸れを防ぎ、身体を冷やしにくくする効果もあります。



■寝袋(ロゴス)

寒さも安心、3枚組シュラフ。

夏は2枚でOK。

シュラフ、中敷、丸洗いOK。

■寝袋(株式会社イスカ)

夏山から冬の低山まで幅広く対応できるモデルです。春秋の3000mクラスには特におすすめします。

軽量化を優先する冬期のエキスパートにも愛用者も多いようです。

また、シリコナイズド・コーデュラ素材を収納袋に採用しました。シリコン加工による独特の滑りやすさが、収納を格段にスムーズにしています。

羽毛量：450g



田村辰男さん 実際に寝袋を使っている姿

☆その他のグッズ☆

** 小物 **

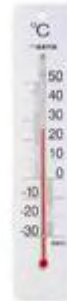
●体温計



●温湿度計



●寒暖計



●霧吹き



** 着衣 **

●ニットキャップ



●目だし覆面



●ネックウォーマー



●防寒インナー



●ハイネックセーター



●ダウンベスト



●レッグウォーマー



●フリース地 ひざ掛け



** 家電ほか **

●カイロ



●電気毛布 電磁波カット機能付



●オイルヒーター



●床暖房



全国支部別機関誌（紙）一覧

『コメント』1. 名称、2. 目的・内容、3. 年何回発行、4. 発行部数

■ 北海道



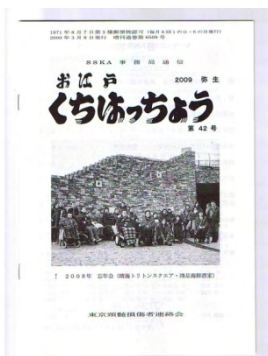
1. 『北国の頸損かわら版』
2. 投稿、お便り、活動報告、関連情報など
3. 不定期発行

■ 栃木



1. 『飛翔』
2. 支部活動・会員の状況・その他情報
3. 年3回を目標にしていますが、今は滞っている状態です。
4. 250 部を発行

■ 東京



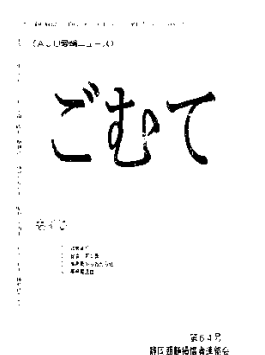
1. 事務局通信『お江戸くちはっちゃん』
2. 目的: 会員への情報提供を第一の目的とし、施設入所する頸損者や地域で生きる頸損者の励みと生きがい、そして地域社会活動の糧になること。
内容: 事務局からのさまざまな報告・予定を掲載すると共に、東京支部役員・会員、他団体、福祉関連に携わる方からの 情報提供で構成されています。
3. 年間 3 回発行 (3 月 8 月 12 月)
4. 部数 : 発送数 150 部 ※手渡分 50 部

■ 神奈川



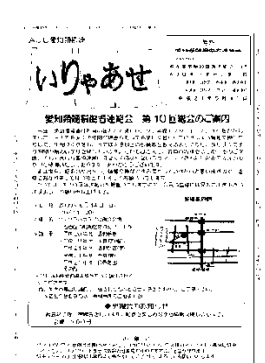
1. 『葉話友 (How are you)』 「お元気ですか？」を漢字に直したものを特徴としています。
2. 会の活動、会員の近況、福祉情報など
3. 年3回(一時期、年一回だけの発行という年もあり危機的な面もありました)
4. 350部(関係団体を含め)

■ 静岡



1. 『ごむて』(その他に事務局通信を発行してます)
2. 最新号の主な記事は、総会時におけるニッシン自動車による手動装置やリフトの点検とペインクリニックのドクターによる脊椎周囲の痛みに関する勉強会です。
3. (今年は)5. 6回の発行を予定してます。
4. 一回30部ほど

■ 愛知



1. 『いりやあせ』
2. 月例会のお知らせ
3. 毎月
4. 150部位

■ 岐阜



1. 『夢旅人』
2. 目的: 「夢旅人」は、私達会員が社会参加を目指し交流する中で、少しでも多くの役に立つ情報の交換が出来ればと発行しているものです。
内容: 制度、岐阜頸損の活動、医療と身体管理、会員活動、福祉用具、バリアフリー情報、新会員の紹介
3. 現在は年に1回または2回、発行月は決まっていません。
最低でも年度末の3月には、1回発行するようにしていきたいと思っています。
岐阜支部の機関誌「夢旅人」も電子版(PDF)を作成しています。

■ 京都



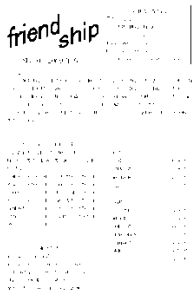
1. 頸損ニュース
2. 情報発信、活動報告、会員紹介
3. 年4回、活動報告(対行政交渉など)、

■ 大阪(兵庫)



1. 『頸損だより』
2. 毎号特集組みしています。
連載記事:「自立生活あれこれ」「必殺! 仕事人」「車輪の一步」など、会員の皆さんの生活紹介(自分自身自身の状況と重ね合わせて読んでもらえるよう、また参考となるよう心がけています。)
何より大阪頸損連絡会からイキイキとした活動の様子が伝われば嬉しいです。
3. 年4回(3月、6月、9月、12月)発行予定

■ 愛媛



1. 『friend ship』
2. 内容は頸損連絡会及び CIL 関係の活動の報告を紹介しています。
(シンポジウム、花見、コミュニケーション支援事業情報など)
3. 年3回を目標にしています。(会報を88年から発行して現在21年目第40号です。)

第2回 全国頸髄損傷者連絡会・日本リハビリテーション工学協会 合同シンポジウム報告

兵庫頸髄損傷者連絡会 宮野 秀樹

今年、3月7日（土）に、ニチイ学館神戸ポートアイランドセンターで行われた第2回全国頸髄損傷者連絡会（以下、全国頸損連）・日本リハビリテーション工学協会（以下、リハ工協会）「合同シンポジウム」が開催されました。速報で当日の様子をお送りしましたが、今回はもう少し詳細に報告いたします。

○関西での開催

このシンポジウムは前年に東京で開催された企画の第2弾として関西で開催したものであり、リハ工協会・頸損連共に関西メンバーが実行委員として運営に携わりました。まあ、頸損連側はお馴染みの兵庫・大阪メンバーが中心に関わったワケですが、今回はいつもと違う“企画・運営慣れた”リハ工協会メンバーが一緒であるため、議論の進め方、段取りの早さに多少の戸惑いはありました。実際、5回の実行委員会会合と役割分担を明確にして個々が担当の作業を進めていく形で準備をおこなったので、ちょっとでも議論に乗り遅れるとどこの作業を進めているのかわからなくなるため、こういうことに不慣れな頸損連側は結構気持ちに葛藤があったのではないのでしょうか。とはいえ、違ったやり方で準備していく工程を経験できたことは大きな収穫であったとも思います。動ける側が動けない者をカバーする、それぞれが得意な分野で補うことが効率的？決して効率を重視するワケではありませんが、そういう方法もあるということです。

○シンポジウムの朝

当日の朝、会場に到着するとシンポジストの一人である米田さんもちょうど到着したところ。私も彼もディスカッションコーディネーターとシンポジストという大役の重圧で冴えない表情。弱々しく「おはよう…」と挨拶を交わしたものの「はあ…」と同時に溜息。シンポジウムテーマは「外へ出ようや！～様々なバリアを乗り越えて外に出

るための工夫～」であるけれど、プレッシャーを乗り越えるのは結構勇気がいる。といってももう二人とも帰れないので役目を果たすしかない(笑)

シンポジウムプログラムは、午前に会場に隣接する神戸花鳥園見学や、8社による福祉機器展、ニチイ学館のバリアフリー宿泊室の見学があり、リハ工協会メンバーが朝早くから各持ち場で参加者を迎えてくれました。シンポジウムも重要ですが、バリアフリー観光や福祉機器の情報を得る場もセットにすることで、参加者には満足してもらえたのではないのでしょうか。その間、我々頸損連メンバーはというと、シンポジストやシンポジウムを支えてくださる関係者と昼食をとりながらミーティングをおこなっていました。自己紹介や進行確認を終えると、否が応でもプレッシャーは高まってくる。柄にもなく緊張していた私は弁当が喉を通りませんでした(笑)

○シンポジウム内容

シンポジウムは会場を埋め尽くすほどの参加者で大盛況。参加者総数は262名、約半数が車いすを使用する障害者と介助者であったことが嬉しかったです。行政機関、教育・研究機関、企業、福祉・介護関係からの参加者もあり、学生も多く参加してくれました。また参加者の居住地域は17都道府県（秋田県・茨城県・埼玉県・東京都・神奈川県・岐阜県・奈良県・京都府・大阪府・兵庫県・岡山県・鳥取県・広島県・徳島県・愛媛県・高知県・熊本県）におよび、シンポジウムをきっかけに遠方から参加した障害者も多く、テーマである「外へ出ようや！」の目的はこの時点で達成されていたといっても過言ではないでしょう。

シンポジウムの内容はというと、4人の重度障害者のチャレンジとその支援者の取り組みが報告され、人工呼吸器使用者である米田進一さんから、一人暮らしや海外旅行という夢の実現に向け、ボランティアの支援による旅行の実践報告、その旅行を支えた学生ボランティアから、ボランティア

の募集や介助指導などをおこない、当事者の自立を支援する難しさが報告されました。また、リハエンジニアとして人工呼吸器使用者の生活を技術支援する支援者から、人工呼吸器や車いすをより使いやすいものにするための様々な工夫が報告されました。赤尾広明さん、桜井龍一郎さんからは、一人暮らしの実現のため住宅探しやサービス時間の交渉の現状を、頸髄不全麻痺者からは、事故に遭ってから復職するまでの挫折と葛藤が報告されました。会場全体を後ろから見ていましたが、各シンポジストの報告に参加者がジッと耳を傾けていたのが非常に印象的でした。



会場参加者の様子

ディスカッションでは、私の微かなコーディネートのもと、生活実態に合わない法律・制度が自立を阻む要因であること、当事者が自ら必要とすることに声を上げ、自ら動くことが理解者をより多く得ることになるといった活発な意見交換が繰り広げられました。もっと発言したかったという方もたくさんおられたようで、時間的な余裕があればよかったと思えるくらい盛り上がったシンポジウムでした。

シンポジウムアンケートでも、プロジェクト報告内容には「とてもよかった」「よかった」に90.8%の記入がありました。感想には「介護者として関わる事の難しさや喜びが伝わりよかったと思う。」

「体が自由に動かないという事以外にも、それらの受傷による心理的な壁みたいなものを乗り越えるということも大きな課題なのだと感じた。」「障害をもっている、自分らしく自立した生活をする事が大切であると実感した。」「出来ない事を悲観するのではなく、出来ることに対して価値を見出す事が大切だと思った。」という、我々が伝えた

かったことを受け取ってもらえた内容が多かったです。全体的にも「障害者の自立が少しでも理解できて良かった」という感想が支援者側から多かったので、このシンポジウム開催は重要なものであったと強く感じました。

○懇親会

シンポジウム終了後は会場を花鳥園に移して、立食形式の懇親会をおこないました。乗り切った安堵感から実行委員もシンポジストも疲労感たっぷり、でも和やかな顔で参加者と談笑。私もホッとしたところにビールが入ってついつい饒舌に。喉元過ぎれば熱さを忘れる、とはよくいったもので、あれだけ準備に労力を費やし、当日も参加者に満足してもらえるよう各担当に走り回ったのに、参加者からの「よかった」の声に次の企画構想を話し合っている。私以外でも各テーブルを回ると次の話で盛り上がっていきそうですから、関西の“ノリ”って怖いですよね。絶対次の“お楽しみ”はありますよ！

○シンポジウムでの課題

今回のシンポジウムで明らかになった課題はたくさんありますが、中でも権利擁護の問題として、障害者が社会参加できないことは「差別」であり、条約や法令にも「差別」の観点を盛り込む、もしくは明記する必要があるという会場からの提言がありました。参加者の中には「差別」という言葉を初めて意識したという意見もあり、当事者と一般の方の意識の違いも多く存在していることがわかりました。当事者や支援者が時間をかけて議論することが重要であると感じています。我々が安心して生活できる社会を作るためには、もっと声を上げていく必要があるということでしょう。「社会を変えようや！」このシンポジウムで感じたことです。

なお、この合同シンポジウムを収録したDVDを各支部に配布しております。興味がある方はお問い合わせください。よろしくお願いいたします。

わたしたちの生活と足が奪われる

ハンドル型電動車いすの「消安法」特定製品指定から見てくるもの

DPI 日本会議・バリアフリーアドバイザー

全国頸損連絡会相談役 今西 正義

私たちが長年にわたり築いてきた地域生活の足、移動手段の一角が崩されようとしている。電動車いすの死亡事故の報道は度々されているが、高齢者の事故として見過ごしていないだろうか。2008 年 3 月に「ハンドル型電動車いすの安全性調査報告書」が製品評価技術基盤機構でまとめられた。僅か 2 回の会議で安全性に問題があるとして、経済産業大臣より消費経済審議会・製品安全部会（2008 年 6 月 24 日）に諮問された。電動車いすを「消費生活用製品安全法」の特定製品に指定するというものである。

■ 事故原因の究明がされないまま厳しい基準が

「特定製品」の指定とは、国で定めた技術基準に適合しない製品は、販売できないという厳しい制度である。一見、安全性が確保され重大事故が減るとして賛成する人は多い。しかし、内容はそう単純ではなく、技術基準の根拠や作成過程に大きな問題が残される。

電動車いすの事故は、2002 年より 68 件、その内、死亡事故は 19 件（ジョイスティック型 9 件、ハンドル型 10 件）が公表されている。大半が利用者の操作ミスや誤使用による死亡事故で、「畦道や農道を走ったり」「下り坂でクラッチを切って走行したり」など、経験も 1 年未満の者による転落・転倒が原因とされるものであった。こうした事故状況を踏まえ製品安全課より「技術基準案」が出された、介護保険等で高齢者が比較的良好に使うハンドル型電動車いすを対象に（障害者自立支援法の補装具として支給されるハンドル型は除外）、アクセルや前進・後進切換え等の操作性と坂道の上下りでの安定性、クラッチ等の機構など細かく厳しい基準が示された。

■ 私たちの足が奪われる

しかし、この技術基準でそのまま製品にされると、従来の製品より大きく小回りが悪いものとなり、新幹線や電車・バスにも乗れなくなり、マンションやデパート、駅のエレベーターも使えなくなる、社会的ミッションとしたバリアフリー社会の流れに逆行する。また、障害者が使う製品を除外したとしても、現実には高齢者と障害者が使う製品の区別はなく、仕様を分けて製造を行う製造業者は考えにくく、市場からの撤退を検討するところも現れている。結果的に、利便性の悪いものしか残らず、選べるものは減り、価格アップなど、すべて利用者へしわ寄せが向けられる。

DPI 日本会議では、高齢者や障害者の地域生活と社会参加の足を奪うものとして経済産業省担当部局へ要望書を出し、製品安全課とも協議を行った。事故原因の究明が不明瞭のなかで、消費生活用製品安全法の特定製品への指定は拙速であること。安全の確保には、電動車いす利用者を交え時間かけて進めていく必要があるとし、JIS（強制力がない法律）の規格見直し、安全教育や販売時の研修、利用者の製品適合評価、道路等の環境整備など。総合的な協議の必要があるとした。

■ 電動車いす（ジョイスティック型）など福祉用具への波紋

まもなく大臣への答申が行われる予定。特定製品の指定は、いままで一般の人が使う「家庭用の圧力なべ」や「乗車用ヘルメット」など 6 つの製品に限られてきた。しかし、今回、初めて福祉用具にまで指定が及ぼうとしており、指定となれば同じように死亡事故の多い「ジョイスティック型電動車いす」や「電動ベッド」など、他の福祉用具にまで広がる可能性は大きい。障害者の地域生活と移動の権利を脅かす大きな問題を孕み、いまが正念場といえる。

経済産業省 電動「PSCマーク」撤回 JIS改正で対応

経済産業省は「ハンドル形電動車いす」(電動カート)に消費生活用製品安全法に基づく「特定製品」であるPSCマーク取得の義務づけ方針を撤回し、JIS改正で対応することにした。また、製品面の改良だけでなく、操作ミス防止のための講習体制や、緩急乗り上げや脱輪しにくいまちづくりといった幅広い議論をするため、厚生労働省や国土交通省など関係者を交えた検討をもつことになった。5月26日開催の「産業構造審議会製品安全小委員会」で報告された。方針撤回により、福祉用具貸与事業者が中古品販売できなくなるという事態は回避された。

経産省は消費者保護の観点から、消費生活用製品安全法に基づいて、基準を満たさない電動カートを販売規制する方針を固め、昨年6月に審議会へ大臣諮問し、それが大切」「製品価格が約

今後は、一体的に進められていた電動カートのJIS規格の作成作業に、PSC案として検討されてきた内容がどの程度盛り込まれるのか注目される。

中古品販売の影響回避へ

介護保険法による福祉用具貸与はレンタルのため「販売」とはされず、規制対象にならない。しかし、実際は一定期間レンタルとして使用後に中古品販売さ

れることが多いことから「中古品販売ができなくなる」とPSCマーク義務化の影響を懸念する声が多かった。今回の見送り決定で、15万台ともいわれる介護保険レンタル利用の電動カートの処分売りは回避されたことになる。

障害者団体・DPI 日本会議の話

障害者団体DPI日本会議の今西正義さんは「拙速な結論は避けるべきと主張してきた。製品基準を義務化しても、事故防止には十分と考えられる」と事故防止に規制ありきの姿勢の問題を指摘してきた。また、

「死」事故を起こした人は使用歴1年未満の人で、使用方法の指導が必要と考えられるため、脱輪や緩急乗り上げの少ないまちづくりなどとともに広く検討することになった」と指摘。さらにメーカーの試算によれば、対応のため製品価格が約2割上昇することについて「コスト負担をユーザーに負わせることにも納得できなかった」と話す。

経産省内で、妥協案として検討された高齢者向けの大型タイプはPSCマーク取得を求め、障害者向け小型タイプを除外することについて「一概に障害者が小型タイプを使用するとは言い切れない」と意見した。

「頸髄損傷者の自立生活と社会参加に関する実態調査」

中間報告

事務局長 八幡 孝雄

1. はじめに

本調査は、(1) 現在の頸髄損傷者の自立生活と社会参加の障壁を明らかにし、頸髄損傷者の自立生活と社会参加を促進する上での必要な社会的支援の在り方を検討すること、(2) 頸髄損傷者および頸髄損傷者を対象とした福祉機器開発者、医療・福祉関係者などに必要かつ有益な情報を提供すること、を目標に実施した。

2. 調査票の配布と回答数

調査期間は平成 20 年 11 月 28 日から平成 21 年 1 月 10 日まで。調査は記入後返送してもらう郵送調査法と、自筆記入が困難な対象者を考慮し、全国頸髄損傷者連絡会のホームページ上に調査票を公開して電子メールで回答してもらうインターネット調査法により行った。

調査票は全国の頸髄損傷者を対象に、全国頸髄損傷者連絡会会員、および日本せきずい基金、(社) 全国脊髄損傷者連合会 16 支部、旧北海道頸髄損傷者連絡会関係者、高知頸髄損傷者連絡会、国立障害者リハビリテーションセンター病院、潮平病院リハビリテーション科(沖縄県)、総合せき損センター(福岡県)の協力を得て、3790 通発送した。

回答者数は 736 名で、調査票による回答が 666 名、電子メールによる回答が 70 名であった。

3. 調査結果

回答者の属性を割合で見ると、年齢別では 20 代以下(6.4%)、30 代(16.3%)、40 代(22.6%)、50 代(25.5%)、60 代(20.8%)、70 代以上(7.5%)、性別では男性(80.7%)、女性(19.0%)となっ

ており、30 から 60 代の男性からの回答が多かった。居住地域別では、北海道(7.7%)、東北地方(6.4%)、関東地方(36.8%)、中部地方(14.0%)、近畿地方(16.7%)、中国・四国地方(8.8%)、九州・沖縄地方(7.2%)となっており、東京、名古屋、大阪などの大都市がある地域からの回答が多かった。損傷レベル別では、C1 から C3(10.6%)、C4(17.3%)、C5(25.0%)、C6(18.5%)、C7, 8(7.6%)となっており、C4 から C6 の回答が多かったが、無回答・無効回答が 21.1%あり、損傷レベルを把握していない回答者が多かった。麻痺別では、完全麻痺(51.8%)、不完全麻痺(39.8%)となっており、完全麻痺者が回答者の半数を占めていたが、「わからない」と「無回答・無効回答」合わせて約 10%あったことから、損傷レベルほどではないが麻痺の状態を把握していない回答者が多かった。

4. 今後の予定

今後は、今年度実施した単純集計分析に加え、クロス集計、統計解析、多変量解析等により詳細なデータ解析を行い、その結果も踏まえて最終報告書として「頸損解体新書(2008 年版)」(仮題)を作成、発行する予定である。

謝辞

調査協力頂いた皆様、関係機関および関係者各位に感謝の意を表す。なお、本調査は、日本リハビリテーション工学協会の協力と、財団法人テクノエイド協会「頸髄損傷者の自立生活と社会参加に関する実態調査」の一環としてその助成を受けて行った。

第36回 国際福祉機器展 H. C. R. 2009

ハンドメイドの自助具から最先端技術を活用した福祉車両まで、世界の福祉機器を一堂に集めた国際展示会です。保健医療・福祉・介護の各分野の制度改革や、事業活動を紹介する国際シンポジウム、セミナーなどもあります。ぜひご参加ください。

2009年9月29日(火)～10月1日(木) 東京ビッグサイト (東京・有明)

HCR ホームページ <http://www.hcr.or.jp/exhibition/index.html>

【出展社セミナー開催】 日本リハ工学協会主催

「電動車いすの味わい方！ コダワリのチェックポイント」

講 師：麿 澤 孝（東京頸髄損傷者連絡会・電動車いすユーザー）

：小林 博光（総合せき損センター医用工学研究部・エンジニア）

「選択と適合」と「開発やモノづくり」双方の現場からみた、電動車いすのさまざまな仕様や性能、機能や整備性などこだわりの視点で、展示会での楽しみ方・味わい方などをお話いたします。

（セミナーはHCR会場内で行われますが、場所日時は未定です。ホームページ等で確認の上ご参加ください。）

全国頸髄損傷者連絡会連絡先

(09.07 現在)

全国頸髄損傷者連絡会・本部

〒162-0051 東京都新宿区西早稲田 2-2-8 全国心身障害児福祉財団ビル 5F
TEL&FAX 03-3208-1655 e-mail: BXN06214@nifty.com
<http://www.saka-ue.cside.com/j/naq/>
【郵便振替】口座番号:00110-0-62671 口座名義:菊地方 頸損連絡会
※ 各支部、地区連絡所に連絡がつかない場合は本部にお問い合わせ下さい。

全国頸髄損傷者連絡会・北海道地区連絡所

〒069-0853
北海道江別市大麻高町 6-11(川原方)
TEL&FAX 011-387-7190
※「北海道頸髄損傷者連絡会」は支部活動を停止し、体制変更しました。

全国頸髄損傷者連絡会・福島地区連絡所

〒961-8031
福島県西白河郡西郷村大字米字中山前 146-1(相山方)
TEL 080-1656-1727 e-mail:hidamari.s@gmail.com

栃木頸髄損傷者連絡会

〒320-8508
栃木県宇都宮市若草 1 丁目 10 番 6 号 とちぎ福祉プラザ内(2F)
TEL&FAX 028-623-0825 e-mail:keison@plum.plala.or.jp
<http://www16.plala.or.jp/tochigi-keison/>

東京頸髄損傷者連絡会

〒143-0015
東京都大田区大森西 3-10-3-101(宮原方)
TEL&FAX 03-3766-6084 e-mail:keison5@khe.biglobe.ne.jp
<http://www.normanet.ne.jp/~tkyksn/index.html>

神奈川頸髄損傷者連絡会

〒228-0828
神奈川県相模原市麻溝台 696-1 ライム 106 号室(星野方)
TEL&FAX 042-777-5736 e-mail:h-futosi@wa2.so-net.ne.jp
<http://www.k-sonet.jp/>

静岡頸髄損傷者連絡会

〒426-0016
静岡県藤枝市郡 1-3-27 NPO法人 障害者生活支援センターおのころ島気付
TEL 054-641-7011 FAX 054-641-7181 e-mail:matunosuke@ca2.so-net.ne.jp

愛知頸髄損傷者連絡会

〒466-0035

愛知県名古屋市昭和区松風町 2-28 ノーブル千賀1F AJU自立生活情報センター内
TEL 052-841-6677 FAX 052-841-6622 e-mail:kito@aju-cil.com

頸髄損傷者連絡会・岐阜

〒503-0006

岐阜県大垣市加賀野 4-1-7 ソフトピアアジアパン 702 バーチャルメディア工房内
TEL&FAX 0584-77-0533 e-mail:kson_g@yahoo.co.jp
<http://www.normanet.ne.jp/~yume/>

京都頸髄損傷者連絡会

〒612-0031

京都府京都市伏見区深草池ノ内町 12-1 ハイツ青風 3-A(古屋方)
TEL 075-645-5818 e-mail:keison@ev.moo.jp
<http://keison.moo.jp/>

大阪頸髄損傷者連絡会

〒534-0027

大阪府大阪市都島区中野町 3-4-21 ベルエキップ・オگران 1 階
自立生活センターあるる内
TEL&FAX 06-6355-0114 e-mail:okeison@yahoo.co.jp
<http://rsakurai.hp.infoseek.co.jp/oaq/>

兵庫頸髄損傷者連絡会

〒674-0068

兵庫県明石市大久保町ゆりのき通 2 丁目 3-5-1-205(三戸呂方)
TEL&FAX 078-934-6450 e-mail:hkeison@yahoo.co.jp
<http://hkeison.hp.infoseek.co.jp/>

愛媛頸髄損傷者連絡会

〒791-2120

愛媛県伊予郡砥部町宮内 394 (有)アイペックエヒメ内
TEL 089-960-7730 FAX 089-960-7731 e-mail:skazu9@peach.ocn.ne.jp
<http://www4.ocn.ne.jp/~keison/index/index.htm>

@：夏が来る。またあの暑くて辛い夏が来ます。私は夏が嫌いです。青い空、青い海、白い雲なんていません。

当然ながら、みなさんご存じのことですが、頸損者は体温調節ができません。私もその一人です。真夏日

が続くと、昼も夜も体温が高い状態が続き、

夏も後半になると体力が尽きてしまい寝だんだり、褥瘡（じょくそう）をつくったりします。日中外にいと1時間もしないうちに体温は38℃を超えています。ひとりで外出したときもし電動車いすが故障して動かなくなったら・・・、と命の危険さえ感

じます。

ここ数年は、この時期になるとネットで熱中症対策グッズを探すことが習慣となりました。なかなか当たりはありませんが、

その中で一番のお勧めは、「アイスリュック

縦型（4800円）」です。

東急ハンズでも購入できます。去年はこれと

首用 アイスノンを併用してうつ熱でダウンすることなく花火見物を楽しむことができました。

予想によると今年の夏も暑いそうです。みなさん、知恵と工夫で夏を乗り越えて、無事に秋を迎えましょう。(K.Y)

リレーエッセイ 夏が来る

編集部よりお知らせ

●『頸損』電子版（全国頸損ホームページ）、ぜひご覧ください。

●編集部員（協力者）募集

全国機関誌『頸損』編集部では、協力していただける方を随時募集しています。ぜひご連絡ください。

●『頸損』をご覧になった感想・ご意見をぜひお寄せください。

●編集部連絡先

住所：〒189-0023 東京都東村山市美住町 1-4-15-1-105

TEL：080-6578-8019 E-MAIL：tosiaki@tokyo.email.ne.jp

菊地 敏明

●郵便振替 00110-0-62671 頸損連絡会

編集後記

まさに盛夏ですね。今回は岐阜で開催された全国総会の特集です。地元の特色を出した“アットホーム”な、素敵な大会でした。

もうひとつ、夏を乗り切る（耐える？）ための情報も読みどころです。「お役立ち」「それぞれの体温調整の工夫」「温熱環境に対する意識」など自分たちがみつけたもの、実際に使ってみてよかったもの、研究者からのアドバイスなどの記事満載です。実際に試してみて、自分に合うものを見つけられたら楽しいですよ。

なお「支部紹介」は、一通りの紹介が済みましたので、しばらく休載とさせていただきます。今後ご要望が多ければ再開ということもあります。

全国頸髄損傷者連絡会 & 関係団体 年間予定 (2009 年 8 月～)

全国頸損連絡会事務局

【2009 年】

8 月	バス事業者との交渉 (交通行動東京実行委員会)
8 月	静岡・岐阜合同行事
8 月 2 日 (日)	神奈川・東京合同交流会 (横浜)
8 月 21 日 (金)～23 (日)	日本福祉のまちづくり学会第 12 回全国大会 (帯広)
8 月 26 日 (水)～28 日 (金)	リハ工学協会カンファレンス (所沢・国立リハセンター)
9 月	東京都交通局との交渉 (交通行動東京実行委員会)
9 月 29 日 (火)～10 月 1 日 (木)	第 36 回国際福祉機器展 H.C.R2009 (東京ビックサイト)
9 月 5 (土)・6 (日)	全国頸損・代表者会議 (京都)
10 月	星が丘病院交流行事 (大阪)
10 月 16 日 (金)～18 (日)	はがき通信・懇親会 (東京) (16 日「四肢麻痺者の生活に有効な支援機器の紹介と展示」)
10 月 18 日 (日)	名古屋シティ・ハンディマラソン (名古屋・久屋大通公園周辺)
11 月	全国アクセス 統一行動
11 月	JR 東日本との交渉 (新宿・JR 東日本本社)
11 月 3 日 (火・祝)	大阪・兵庫・京都合同行事
11 月 7 日 (土)・8 日 (日)	四国頸髄損傷者連絡会・交流会 (愛媛県四国中央市)
12 月 5 日 (土)・6 日 (日)	障害者政策研究全国集会 (新宿)

【2010 年】

2 月	星が丘病院交流行事 (大阪)
3 月	全国頸損・代表者会議

※全国機関誌『頸損』発行 8 月・12 月・4 月 (年 3 回)

DPI 常任委員会 偶数月予定

※海外編

2009 年 10 月 12 日～15 日	アメリカの福祉機器展 (Medtrade Show 2009)
2010 年 3 月 22 日～27 日	リハビリテーション工学の学会 (CSUN Conference)

第24回 リハビリテーション工学カンファレンス

「飛翔 いま考える、当事者発のリハビリテーション工学」

東京頸損連絡会 越澤 孝

開催日 2009年 8月26日(水)～28日(金)

場所 国立障害者リハビリテーションセンター (埼玉県所沢市)

主催 日本リハビリテーション工学協会

第24回 リハ工学カンファレンスホームページ <http://www.resja.gr.jp/conf-24/index.html>

- 研究発表 口頭発表・インタラクティブセッション
- 基調講演 講師:小野栄一氏 (厚生労働省 障害保健福祉部福祉工学専門官)
- パネルディスカッション 「いま考える、当事者発のリハビリテーション工学」
- 障害当事者セッションーわたし流環境デザインー
- 全国頸髄損傷者「実態調査」報告会
- 初心者向け福祉機器講座
- 福祉機器コンテスト2009

■ 全国頸髄損傷者「実態調査」報告会 [8月27日(木) 15:10-16:40]

「頸損実態調査から見えてきた課題と今後の取組」

企画:全国頸髄損傷者連絡会・日本リハビリテーション工学協会

- (1)頸損実態調査 趣旨説明 三戸呂克美 氏 (全国頸損連絡会 会長)
- (2)調査報告 越澤 孝 氏 (日本リハ工学協会・全国頸損連絡会)
- (3)ディスカッション

宮野秀樹氏(兵庫頸損連絡会)、渡辺啓二氏(東京頸損連絡会)

斉藤文子氏(国リハ病院)、小林博光氏(総合せき損センター)

■ 障害当事者セッション[8月26日(水)・27日(木)・28日(金)]

「障害当事者セッションーわたし流環境デザイン」

障害当事者の方が日ごろの自らの経験・気持ち・研究をもとに、生活を支援する道具や技術にまつわる話題を提供します。私たちは、このセッションを通じて、リハ工学研究者や開発者が障害当事者のことを知る場、リハ工学研究者や開発者と障害当事者が知りあう場が生まれることを期待しています。

さらに、障害当事者に真に必要とされる道具や技術を開発するために、リハ工学研究者や開発者と障害当事者が一緒に考え、ものづくりを進める道筋を考えたいと思っています。リハ工学研究者や開発者の皆さん、障害当事者の皆さん、あなたが知らなかった道具や技術の利用方法を知るチャンス、道具や技術の開発のアイデアを発想するチャンスです。

発表者:頸髄損傷者、脳性麻痺者等の肢体不自由障害者、視覚障害者、聴覚障害者、精神障害者、他
(全国頸髄損傷者連絡会の会員、数名も発表予定です)

今年のリハ工学カンファレンスは当事者(ユーザー)の参加を歓迎する楽しい、わかりやすい、プログラムや企画になっています。参加費も特別に当事者枠を設け、例年のカンファレンスより気軽に参加できる設定になっています。リハ工学に興味のある人も、ない人もぜひ参加してください。私達が使っている支援機器に対する考えが変わることと思います。

【参加費】(参加登録用ホームページ開設中)

- 障害当事者・学生: 8000円(3日間) 3000円(1日のみ)
- リハ工学協会会員: 13000円(3日間) 5000円(1日のみ)

二〇〇九年八月九日発行
SSKA 頸損増刊通巻第六六一号（毎月六回一・六の日発行）
昭和四十六年八月七日第三種郵便物認可

発行人
編集人

障害者団体定期刊行物協会
東京都世田谷区砧六―二六―二一
全国頸損傷者連絡会
東京都新宿区西早稲田二―二八―五F

頒価二五〇円